

津高同窓会報

発行所
津市新町3丁目1-1
津高等学校
同窓会事務局
TEL・FAX 059-229-7331
共立印刷株式会社

ご挨拶	2
私の人間形成は津中のおかげ	2
自分流に生きた銀座の56年	3
松阪陣川親文会のこと	4
後に幸ある身の運を	4
佐々木かよこさんを読んで	4
出戻りの津高生	5
人生の応援歌、「三重きんぎょ」	5
憧れのヒマラヤ ストックカンリ	6
(六二五三)に登場して	6
年齢と共にかわる同窓生の色模様	6
今と青春のアーカイブ	7
同窓会資料からみる弘田龍太郎	8
世界バスル選手権に出場して	9
ラグビー同好会再出発	9
津高校進路事情	9
各地で同窓会開催	10
物故者	11

そのぶき、名永遠に朽ちず

「義務」

同窓会長 川喜田 貞久 (昭和27年卒)



原稿依頼が多い。物書きの生活も悪くないと思うが、私の文章に金を払う人がいるとも思えない。まあ、タダでも頼まれるうちが花か。去年も八月に原稿を書いて十二月に発行されている。去年は総選挙の前だった。今年も自民党の総選挙を前にして書いているが同窓会に政治の話は避けたいところだ。私は去年の六月に銀行の取締役会長

を辞しタダの相談役という肩書きになった。トップの身の引き方もいろいろよつた。私の場合は世の中、所詮誰かに渡していくものと普段から考えていたのと、いい隠居になりたいという願望があった。私の言っている隠居とは跡取りが困って相談に来たときだけ相談に乗る。それも昔はこんなこともあったよと話す程度にとどめて決定は跡取りに任せる。跡取りが駄目なら貧しいご飯で我慢する。少し格好よすぎると自分でも思うが世間を見ているといかにも往生際が悪いトップが多い。そこでいつもの反省心が首をもたげてきたのだ。

相談役で一年余が過ぎ、ようやく少々慣れてきた。所用がなければ出勤しない。結構外部の仕事や委託があった。週半分の収入は顔を出す。銀行へ行かなくても別の場所に出動という日も多々ある。フリーの日は少ないがそれでも過去の生活とは雲泥の違いといつてよい。やっと時間を気にせず散歩をしたり、好きなクラシックを聞いたり、本を読んだり出来る日が増えた。



「星の王子様」の新訳(河野万里子訳 新潮文庫)に釣られて「人間の土地」(堀口大学訳 新潮文庫)も読み直した。余裕が出来たと言ってもいい。それにしても神様はよくもサン・テグジュペリのよき人間をおつくりいただいたと思う。何回読んででもその度に線を引き言葉が見つかる。彼の勇気を絶賛

する人が多いようだが、その勇気は世界中のひととの連帯感(すべての人に対する思いやり)と言ってもいいように思うが)が基本にあって、そこから出てくる自分より他人を優先させる人生への義務感が感動を呼ぶのだと思う。この義務感こそが私が過ごしたい晩年の目標と言えよう。

タイトル・書「創立百年記念讃歌」より
工藤雅俊(昭和45年卒)
絵「サリーの女たち」
森谷重夫(故・元津高教諭)

ご挨拶

学校長 渡辺 久孝



本校の教育活動に暖かいご理解とご支援を賜り心から感謝申し上げます。

私は、四年間本校の充実・改革に取り組んでいただいた水越利幸校長先生の定年退職に伴いまして、津高校第十九代校長を拝命致しました渡辺久孝と申します。津市に住んでおりますが、申し訳ないことに大阪出身で、同窓会

員ではありませんが、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。
今年も八月に開かれました陳川・三重校・津高同窓会は「再会 新しい津へ」をテーマに七百二十七名の会員の皆様がお集まりになり、噂に聞いておりました通りの皆様のパワーと想いに感銘を受けました。
さて、本年度も、授業力の向上やキャリア教育の推進など具体的な目標を掲げて取り組み、より一層、生徒、保護者や地域の方々から信頼され、敬愛される学校を目指しております。

話題として、十三名の中国の高校生を学校やホームステイで受け入れたこと。保護者向けに一週間授業を公開したところ、百二十八名が来校され、大変好評だったこと。また、夏休みのマレーシア研修には、二十三名の生徒が参加し、農学部でのホームステイや学校訪問を通じて、一段とたくましく成長したことがあります。
部活動は各部が大変熱心に取り組み、ボート部、陸上部、相撲、音楽部などは全国レベルで健闘しています。とりわけ、ボート部の清水大輔君は、八月

にオランダで開催された世界ジュニア選手権に出場し一段とたくましくなりました。この秋の国体では僅差で第二位でした。低迷していた本県の国体順位引き上げに貢献してくれました。
最後になりますが、会員の皆様のご活躍とご健勝をお祈りして挨拶といたします。

私の人間形成は津中のおかげ

太田 典雄 (昭和8年卒)



私は今年の六月で満九十一歳、何時の間にかこの年まで生きて来ました。

これはひとえに、私を温かくお世話下さった皆々様によるものですが、心身を鍛える年齢によく鍛えられ、多くの知識を教えられたのは、やはり津中の五年間だったと思います。

在学中の四年間は汽車通学で五年生の時、近鉄が津新町駅まで開通して電

車通学になりました。松阪市久米町の自宅を朝早く起きて朝食の後、手早くゲートルを巻いて鞆を肩にかけ、自転車で乗り、駅まで約三キロの旧国道を北進します。最初の二キロは道の両側に家並みが続いていて良かったのですが三渡橋から六軒駅までの一キロは、家が少なく冬季には北風に悩まされて自転車が少しも進まない時もありました。汽車が阿漕駅に着くと松阪、六軒高茶屋から乗車した津中生数十名が下車して、一同となり校舎に向かって足早に歩く光景は見事で、一つの風物詩になっていました。右に刑務所を望み、国鉄のガードの下をくぐり岩田川の橋

を渡って、古河の津中正門(現在の西橋内中の位置)まで約三キロを歩く運動量は、自宅から自転車に乗った馬力も含めて相当なエネルギーを消費しました。今から思うと私にとって身体を鍛えるためには絶好の通学路であったと思います。
昭和三年四月に入學した時、私たちは皆、県内の小学校で成績上位の者ばかりでした。スリーラインの制帽にハイカラーの制服を着ると、自然に身が引きしまりました。新人生二〇〇人は甲、乙、丙、丁の四組に分けられましたが、成績はどの組も同じレベルでした。殆どの生徒が進学希望でしたから、授業はどの科目も厳しいものでした。先生は実力のある一流揃いで、何を質問しても直ぐに満足な答えを聞くことが出来ました。特に英語、数学、国語の三科目に重点がおかれ、五年生にな

るとこの三科目の成績合計点の順にA組からD組まで四クラスに分けられ、座席も後から前へ成績順に並びました。所謂、能力別編成の授業が津中では既にこの時代に実施されていたのです。クラス分けの授業が始まる前の休憩時間には、各自鞆をもって夫々の教室へ移動します。私は数学だけは成績がとびきり良くて英語と国語は普通でしたから、A組になりましたが座席は前の方で先生の教卓のすぐ傍でした。よく先生に指名されて内心閉口しましたが、そのため何時も真面目に勉強が出来て、実力がつき良かったと思います。
またクラブ活動も盛んでした。毎日の放課後は勿論のこと、一学期末の試験がすむと体育クラブは夏休み中に行われる県内の中学校体育大会のため、猛練習を行いました。私たちがクラブをしない生徒は津市の海岸で水泳の訓

練でした。美しい松林や砂浜で海水浴とフンドシひとつで、先生の監督のもと、上級生が下級生を指導しました。安全のため数隻の和船が用意され、絶えず上級生が監視していました。私ははじめ泳げなかったのですが、二年生



の時に五丁(約五四五m)を泳ぐ試験に合格して、帽子に一本の線を貰い、三年生で二五丁の試験に合格して線が二本になりました。現在私が泳げるのも津中でしっかりと訓練されたおかげです。

昭和の初期は大正時代の第一次世界大戦勝利の影響もあって、男子の中学校では「教練」と言う科目が週二時間ほどありました。久居の連隊から配属将校がきていました。一、二年生は徒手で集合や行進などを練習しましたが、三年生になると銃を肩に担ぎ腰に剣をつけて、本式の軍事訓練を受けました。年に一回は「査閲」があって運動場で

普段の訓練ぶりを軍に披露しました。五年生の時だったと思いますが、津中の新校舎が未だ建っていない津市刑部の敷地で、寒風に吹かれて査閲を受けたことがありました。その時「ここは将来新校舎が建つ場所なのだ」と初めて知りました。軍事訓練は時代の趨勢でしたが、訓練そのもので心身が鍛えられ、規律正しい生活を送ることが出来て長寿にも繋がり、私の人間形成に大いに役にたったと思います。

さて、津中はこのように毎日が厳しい雰囲気でしたが、楽しいことも多くありました。恒例の遠足・修学旅行、運動会、マラソン大会など毎年催され

ました。特に在学中にたった一回経験した実にユニークな行事を披露しておきます。それは三年生の春、全校挙げて「兎狩」が催されたことです。先生と生徒の約一、〇〇〇人が各自、竹の棒を持って津市半田の山を取り囲み、徐々に輪を狭めながら野兎を追うのです。はじめはなかなか見つからなかったのですが、時が経つにつれて、あちらこちらで歓声があがって、数匹の兎が捕獲され、お昼に美味しい「兎汁」を馳走になりましたが、こんなことは私の一生で唯一度だけの愉快で楽しい思い出でした。

(元松阪工業高校校長)

自分流に生きた銀座の56年

高橋 弘(昭和25年卒)



津中に転校を許されたのは昭和二十五年五月で二年一組でした。戦史に残る昭和二十年三月十日の東京大空襲で東京を逃れ津に疎開しました。

津市も間もなく戦火が及び学校も灰燼に帰し、日本国民が苦難の日々を経験する事になったのです。学校の先生

方は非常に個性的な方が多く初めのうちは友達にも恵まれ結構楽しい学校生活だった様に記憶しています。戦後は男女共学になり久居校舎では寒さと蚤に悩まされ一番元氣な年代にも拘わらず体調を崩しそれらの環境に馴染めず成績は振るわず何とか卒業できましたが、兎に角東京に戻りたい思いは強々、「選択肢は沢山あるはずだ、それからでも遅くない」と単身東京に戻りました。

「あなた商人で身をたてんか、銀座の有名な洋品店の田屋さんの創業者、

梶原市太郎さんが三重一中の出身ですよ、商人いうたって馬鹿にするんじゃないよ」と、熱心にアドバイスしてくださいました。私の生い立ちが銀座と縁のあることや、何一つまともな事も出来ない若造だったが、人と同じことをやる事に非常に抵抗を感じることだわり性格が決め手となり、昭和二十五年五月に老舗銀座タニザワに入社する運びとなりました。創業者は「靴」と言う国字の提案者で創造的企業家でした。

当時、朝鮮戦争勃発、連合国の兵士が銀座を闊歩し商売上英会話がどうしても必須になり青山学院の英会話塾に通いました。住井先生の指導の下地もあり基本系の会話が身に付き、先輩同僚が不得意とするところを多少自信も



して他社の追従を許さない優良品の提供に切磋琢磨した賜と言えましょう。店には政界・財界、文壇、画壇、各界の時の有名人もこれ、中に津中の先輩もおられました。

銀座の商人はどんな方が来られても臆せず礼儀正しく親切に専門的に応対できる機会が与えられており、自分の置かれている立場に一般サラリーマンでは経験出来ない優越感さえ覚えられました。銀座人生の経験から、要求されるものに対して絶対言ってはならない言葉に「それはありません」と言う言葉です。「何とかして造らせましょう」これに徹して商人としての意地を見せた事が多くの顧客の信用を得ることに繋がったと考えています。

出てきました。昭和四十年代アメリカのマーケット視察のため渡米、特に西海岸中心に発達したショッピングセンター関連セミナーを受講、五十年代は欧州を中心に芸術性と伝統美の習得に何度か渡欧、さすが彼らの物造りに対する美と執念には素晴らしいものがありその感性におどろきました。私は四十年代から特に商品開発企画を担当してきましたので彼らの意欲と感性は総べてお手本になりました。

昭和二十八年エリザベス女王戴冠式に昭和天皇の名代として皇太子殿下が欧州旅行されるに際して宮内庁より靴のご用命を受け、また、三十四年ご成婚に対しては多くの靴を納入しました。それと言ったのも信用と永年の製品に対

私は、五十六年の永きに渡り、日本の銀座を見つめて参りましたが、最近の銀座は軒並み外国ブランドに押しつぶされそうな様相を呈しております。兎に角変化の著しい時代に入ったと言え、現在の、日本の銀座すべてに言えることは、変わって然るべきもの、変わってはいけないものを見極めをしっかりつけたいと将来、禍根を残すことになりません。後世を担っていく若い世代に目先にとらわれないことのない指導者になって欲しいと思ひ、銀座を見つづけてきた七十五歳の大番頭と呼ばれている私が後輩に役立つならと重い筆を執りました。

(銀座タニザワ専務取締役)

松阪陳川親交会のこと

榎垣清彦(昭和24年卒)



諸兄の皆さま如何お過ごしでございますか。初めての便りをさせて頂きます。私共の松阪陳川親交会も今年で三十八回目を迎えました。津高会報を通じて本会のことを皆様知って頂きたく、一筆述べさせていただきます。

そもそも本会は、昭和四十四年に先輩であります宇野さん(元三雲町長)、杉本さん(老松園経営)、笠原さん(伊勢寺町)の方々のご提唱により発会され、会員は松阪市内を中心として一志郡、飯南郡、多気郡にお住いの卒業生を対象として、名称も「松阪陳川親交会」として生まれました。会員の

中には、津中に入学されましたが、学制改革のため本校を卒業することなく他校へ転校された方もおられる現状であります。そして今日まで年一回の会を持ち、途切れることなく現在に到っております。

発足当時は先輩も現役の方が大半を占められ皆様盛年の頃で出席者も百名を超える程の盛会の年もあり、同学年のクラス会にはない雰囲気の中で年齢

病気になるれたり又物故されたりして出席会員数も激減して行くばかりであり、現状では十数名から二十名たらずの出席者になっています。

を超えたまことに和氣調々のうちにも会は盛り上がり、先輩が思いもよらぬ裏芸を披露されたり又本職も及ばない所作をされたり等お開きの時は次回が待ち遠しい気持ちで帰路についたのは私一人ではないと今でも思っている次第です。

さて、日は変わり年移りして回数を重ねて行くうちに、出席会員の数が多少の差こそあれ年々減少の道を辿り始めました。即ち会員が年をとったこともさることながら、会員の資格が昭和二十年入学者が最終学年でありますので増員が望めない状況もありました。平成に入ってから会員も殆ど全員が遺骨を迎える年齢になり最近の十年間は、

後に幸ある身の運を

永田(後藤)千代(昭和20年卒)



の春でした。二千六百年とはまさに千載一遇のこと、國を奉じて祝った少女の日も遙か昔の夢のような思い出です。やがて五年を経て国破れ皇紀という紀元は消えて以後西暦が採用されるよつになりました。

真新しい制服に足取りも軽く、からたちの垣根に続く女学校の門をくぐったのは皇紀二千六百年(昭和十五年)

一年生の放課後に弓道場へ足を運んで、上級生の美しい立姿や、静寂の中に響きわたる的中音の爽やかさに魅

佐々木かよさんを偲んで

奥山(東)美登子(昭和19年卒)

第三代三重桜部会長として、平成五年度よりその重責を果たされました。

戦後の教育大改革で当時としては画期的な女性校長となられましたが、以来学校教育をはじめ保育、婦人会、老人会にとあらゆる場で女性の指導に尽くしてこられました。人と話すことが大好きだと言われ、立派な体格とよくよかな笑顔で精力的に行動されました。

三重桜百周年記念大会の発行には強い情熱を傾けられ、会長としての

生きがいとされていきました。

いつも姿勢正しく、とても九十歳の婦人とは思えない様子で、お化粧も美しくなっていて、お好きな紫色のお召し物が多かったとつです。会長さんとして隙のない責務をお持ちでした。

立派に百周年大会を終えられてご満足であったと思われまふ。長い間のお働きに感謝致しますとともに、数々の指導を有難うございました。

(元三重桜事務局)

せられていた私は二年生になり漸く憧れの弓道部の一員となりました。はじめて握った一番弱く弓でさえ引き分けることの難しさを身をもって知りました。わが弓道部は伝統的に強く、優秀な先輩を見習って、日毎「射者礼也」を心に刻みつ、技を修めていきましたが、弓の道は習う程に奥深く厳しく、見ると行つとの大きな相違をつくつく実感しました。

同年の十二月八日には弓道場の庭で、校長室のラジオから米・英への宣戦の詔勅の放送を聴きました。大東亜戦争の勃発です。思えば小学六年生の冬頃日米間に経済摩擦が起きていることを担任から聞いてはいました。

三年生になると物資の統制が厳しくなり通学の足だった軽便鉄道の燃料も不足を来たし、登坂では列車が息切れすることも度々で、レールも国に供出されるの理由で遂に廃線され電車通学に変更する情勢となりました。制服も次第に色褪せてきましたが購入するにもスフ入りで純毛品が入手できないに、意を決し土曜日の午後と日曜日を利用して、裏返して仕立直すことにしました。セラー服の白線も丁寧に外しすっかり解体して洗い乾かして、必死にミシンに向かいとつとつ制服の裏返しをやり遂げました。決断も実行も皆早く若さに溢れて物怖じもしなかつた当時のわが姿を、今の私からは別人

の思いで振り返っています。
 五年生になって日も浅い頃四・五年生に学徒勤労動員令が下り、やがてペンをハンマーに持換え軍需工場へ働きに行くことになりました。五年生になったら――と期待していた卒業記念の修学旅行もアルバムも無いまま、卒業の日を迎えました。私はそのまま残り専攻科生として工場へ通い、大地震や空

出戻りの津高校生

箕田 健生 (昭和27年卒)



昭和二十一年四月、私(旧姓 沈)は憧れの津中学校に入学した。しかし校舎は久居の旧三十三連隊の兵舎跡で、殺伐とした環境であった。学生の服装も制服などは無く、思い思いの粗末な学生服で、持参の弁当も芋や野菜混じりの飯で、皆空腹に耐えていた。しかし戦争が終り平和な時代になり、安心して勉強に励める私達中学一年生にはバラ色の未来が待っているように思われた。私達を教える先生方には素晴らしい情熱と豊かな個性の持ち主が多かった。私が所属した一年五組の担任で国語の米本宏先生(シャジンさん)、歴史

襲の恐怖にも耐え乍ら機械の騒音の中で日を送るなど、夢無き時代でした。でも在学中には温かい思い出もありました。それは、お母さんのように尊敬し慕い続けた竹島と米先生に巡り合えたことです。先生の教えはいつもおぼろかでもすくすくは役に立たないかもしれなけれど、きつと後々に真価を発揮し

の野田彦四郎先生(アエテさん)、数学の岡門之助先生(ヒゲさん)、美術の林義明先生(ヤギさん)等々、多士済々であった。津中学に入って初めて私は勉強することの楽しさを知った。学校ではクラブ活動も活発で、私はバレー部に入部し先輩から厳しく鍛えられた。

充実した二年間が過ぎた昭和二十三年四月、学制改革により旧制津中学校は新制津高校に変わることになったが、私達二十一年入学組は中学三年生のため、津高校に所属することが許されず、各々の出身地の新制中学に分散、編入させられることになった。まさに晴天の霹靂であった。(今から考えると、実に不可解な学区制改変であり、他府県では旧制中学は全生徒が、そのまま新制高校に編入されるのが通例であったように、三重県が例外であったよう

誰からも認められる能力を備えていませよ」と励まして下さいました。今はもう恩師も殆ど居られず、懐かしの学舎も消えて久しく、昭和も遠く去りつつあり感慨も一人です。三重県の同窓の皆様もそれぞれに女の道を治められ、身の運を如何開かれたでしょうか。さぞかし素敵な人生の花を色とりどりに咲かせられたとエエ存じます。



である。二十一年入学組のお別れ会の当日、私はクラスを代表しての挨拶を指名された。五十八年前のことで、何を話したか定かではないが、津中の二年間で学んだ事を決して忘れず、近い将来必ず津高に戻りたい」と述べたと思う。上級生から「必ず戻って来いよ」と激励されたのを覚えている。その後、私は久居中学、久居高校と流浪の二年間を経て、昭和二十五年四月やとと待望の津高にカムバックする

ことができた。私にとっては初めて見る新築の津高等学校の校舎はその時なんとまぶしく輝いて見えたことか！私の津高での二年間は今までの借りを返すかのように、勉学、生徒会活動、演劇部活動と盛り沢山であった。演劇部では、部長の米本先生に熱心な薫陶を受け、多くの良き先輩、同級生の懇切な指導、鞭撻を得た。演劇部研究発表会では、「怒濤」、「亀裂」、「町人貴族」、「女学者(写真)」に出演した。

津高卒業五十二年後の現在、私は毎年五月に開催される、お元氣な米本先生を囲む津高演劇部同窓会(シャジン)

会に出席するのを楽しみにしている。各地から仲間が毎年二十数名集まって賑やかである。また津高二十七年卒業関東同期会も毎年十月、東京で開催され、数十名の仲間が集まり、楽しいひと時を過ごしている。私はこの二つの会に出席するたびに、津高時代に恩師、良き先輩、仲の良い同級生達に恵まれた幸せを痛感している。

(元帝京大学教授、とだ眼科院長) 思いでの写真説明
 モリエール作「女学者」
 (津高演劇部第10回研究発表会、昭和26年8月、第一劇場)

人生の応援歌、"三重ぞく"ら

土井(横田)ちづ子 (昭和42年卒)



平成十七年十一月二十五日、実家の母・横田志げ子が八十六歳で永眠しました。入院してから、亡くなるまで二十日間という短い期間でしたが、家族

皆で見守って看病出来たことは、残された家族の絆を強め、逆に皆が励まされもしました。亡くなる二日前まで意識もはっきりしており、お見舞いにくてくださった方にも「ありがとう」と礼を言い、見舞いに訪れた孫には逆に「頑張って」と声をかけていた母でした。入院中、津高創立一〇〇周年記念のCDで、津高等女学校の校歌を聴かせると大変喜んでおりました。

葬儀の折にもCDを流して頂き、最後のお別れの時には同級生の方が校歌を歌って母を見送ってくださいました。母にとっては、あの世への旅立ちの歌となり、喜んでいただけと思います。

私の長女(孫)が五月に結婚した折にも、披露宴で歌ってくれました。その時には校歌を歌っても皆さまにはわからないのと思いましたが、病院でCDを聞かせつつ一緒に歌うと、まん

ざら結婚式で歌ってもおかしくない歌詞だと思いました。校歌を誇りに思い、母の人生を励まし続けてくれた校歌、それは最後まで母の人生の応援歌でした。

憧れのヒマラヤ

ストックカンリ(六一五三m)に登頂して

若林 英郎 (昭和40年卒)



能であり、夏のモンスーンの影響をあまり受けない山域であること等の観点を踏まえた結果、インド北部のラダック地方に属するストックカンリ(六一五三m)に決定しました。

夏季休業中と

私にとって海外遠征登山は、平成八年八月、モンゴル国の最高峰フィティン峰(四三三四m)へ登頂して以来二回目です。当時、私は本校教諭で山岳部顧問として参加しました。それから数年後に今回の海外遠征の話が持ち上がり、計画が具体化した二年前に私は即参加の意思表示をしました。

目標の山は、休暇取得が可能な夏季休業中で、現在の体力、技術で登頂可

はいえ十九日間の日程と費用もかかるので、結果的に七名の参加者にとどまりました。私はたまたま最高年齢というところで隊長の役を仰せつかりました。ただ、十分なトレーニングができず、正直不安一杯でした。隊としては昨年十二月末の御岳や今年五月の北アルプスでの雪上訓練、そして六月末から出発直前まで、富士山での一泊二日の高所訓練を四回実施しました。個人的に

は名古屋の会社にある低酸素室での自転車トレーニングも取り入れました。

七月二十七日(木)成田空港からインドの首都デリーへ、七月二十九日(土)ラダック地方の旧都レーに入り三日間滞在。レーはすでに高度約三五〇〇mあり、ここでの高度順応がまずポイントでした。八月一日(火)ストック村(標高約三四〇〇m)からキャラバン開始。この日はモンカルモ(標高約四四〇〇m)まで高度を一気に約一〇〇〇m上げるため、当然ゆっくりとしたペースでしたが、途中胸を圧迫されるような高度障害に襲われました。荷物を軽くし、複式呼吸を一生懸命続けた結果、モンカルモに到着した時には、胸の苦しさは治っていました。ここでは雲間にストックカンリの鋭峰を仰ぎ見ることができました。そして高度順応をしっかりとさせるため、さらに三日間滞在しました。期間中は周辺の丘を散歩したり、できるだけリラックス

スして過ごしました。結果的にモンカルモでの順応がその後の行動にプラスに働きました。八月五日(土)ベースキャンプ(高度約四八五〇m)に入りましたが、天気は予想外に不順で、毎日のように雨が降り、四日夜の十時には河原のテントを近くの高所に急遽移動したこともありました。

八月七日(月)アタックキャンプ(高度約五二〇〇m)に入り、八月八日(火)に頂上アタックをしました。午前〇時に起床し、午前二時前に出発もちらんヘッドランプをつけての行動です。氷河をわたり、雪の大斜面を登り、午前七時頃標高約五八〇〇mの稜線に出ました。これからはガイドとともにメンバーを二班にわけ、アンザイレンして一気に頂上へ。午前九時過ぎ全員が念願の六一五三mのストックカンリの頂上に着きました。ただ、残念ながら天候は曇りて眺望は得られませんでした。私はバタバタで、必死の思

いで登った感じでしたが、他の隊員は元気いっぱいでした。頂上に着いた時、様々な思いがこみ上げてきて、他の隊員と握手しながら号泣してしまいました。九時半頃下山開始。午後二時半アタックキャンプ到着、休憩後テントを撤収し、午後五時半頃ベースキャンプに戻りました。約十五時間行動という長い一日でしたが、心は満ち足りていました。

モンゴル遠征から十年、平成十八年は私にとって教員生活最後の年でもあり、山岳部顧問の集大成として、記念すべき最高の年となりました。五十九歳の年齢で、憧れのヒマラヤの六〇〇〇m峰に登頂できたことは、わが登山人生で最高の思い出であり、家族はもちろんのこと、応援してくださった多くの山仲間や学校関係者の皆様にも心より感謝いたします。もし可能ならば、次回は七〇〇〇m峰へと密かに思っています。(津高教頭)

年齢と共にわかる同窓会の色模様

福島 礼子 (昭和44年卒)



急速に変化する。卒業した当座は、学生生活や仕事などと、身辺におこる出来事を消化するのに精一杯。少し落ち着いた頃からは、急に同窓会が向こうからやってきた。

今から思うと、一番、気を使い、思い切りが要ったのが、卒業後十年ほど

たった最初の同窓会だった。一人で会場に足を踏み入れるには、気後れする。私は友人を誘うことにした。彼女も同じ思いで、二人して受付に足を踏み入れる直前には、化粧室に駆け込んだものだ。

始まってしまえば、同級会は、まるでおもちゃ箱をひっくりかえしたよう。言葉と笑顔とアルコールが入り乱れ、収拾がつかないままにお開きになった。思い出を懐かしむには、まだ皆若すぎ

年齢によって同窓会に対する思いは、

て、やたら笑って時間がすぎた。若いということとは、「ひそかに競いあう」ことなのだ、私はこのとき学んだ気がする。

同級会にしみじみとした空気が流れだしたのは、私が四十路を迎えてからだ。高校時代がセピア色の写真のように見えたからかもしれない。あるいは、「かけがえない時代」は、もう決して帰ってはこないのだと、実感し始めたからだろうか。

ある年、同級会が終わり、同乗した車で男友達と奥さんの闘病生活の話をつぶやいた。子宮がんで妻を「くすかも知れない」と思った不安。手術を受けて「これからも、いっしょにがんばって約束した」と彼の言葉は、普段なら不謹慎な話題なのに、妙に私の心を熱くした。

私の世代は、働き盛りに不況のおおりにまともな収入がなかった。だから級友から仕事のストレスや家族の「きんしゃん」の聞き手になることもよくあった。それらは全て、同級会の表の部分ではなく、二次会の片隅や、会が引けた帰り道であつたりした。

次の会まで顔をあわす機会はなく、しつこく関係でもない。一夜だけという暗黙の了解のうえの「気を許した間柄」だからだろう。打ち明け話は、話し手の心の荷物をほんの少し軽くし、私自身も相手の立場によりそい、自分とは違った人生を、かいま生きることができた。

人生は決して華やかで明るいものばかりとは限らない。逆に歳を重ねると、暗い色調の出来事が増えさえる。しかし物悲しさや辛さが加わって、人生はいっそう深みを増すものらしい。こつくりした色調には、必ずブラックの絵の具をほんの少し混ぜるように。

でも、同級会の話題は、種々雑多でかしましい。同窓会で大切なこと、それは、とても地味でシンプルだ。ゆきすりの「打ち明け話」ができる包容力をもつこと。それが、どんな催しやおいしい食事よりも、本当は一番求められるものなのだと思ふ。

今と青春のアーカイブ

青山 吉 秀 (昭和46年卒)



昭和四十六年卒業以来、慌しく通り過ぎた三十五年余り、改めて今の自分と青春時代の情景を思い出しながら一つのファイルにしてみる。

デザイン系の大学を卒業して某自動車会社に就職、東京転勤や欧州赴任を経て、近年はほとんど愛知県で車のデザインに従事。

一、何故この道に入るようになったか。
I 美術担当の森谷先生から、「君は将来、絵に関係した道に進むといいんじゃないかな」と言われたのが、

その後を決定付けたように思う。

余談になるが、森谷先生の昔の作品に、独身時代の妻が、モデルの絵がある。偶然にもそれと出会った時即座に買い求められなかった自分の不甲斐なさを今も悔いている。是非もう一度見たいものである。

II 当時のいくつかの時代背景から自分でも何か主張をもち、形にし社会に残したい。そして、なんらかの貢献になれば、との思いがあった。

① 背景の一つ、学生運動のなごり長髪や服装について熱く語っていた。彼を最近、HPで発見した。こんなに老けてしまったのかと。いや失礼!

② 次にファッション
当時はまっていたのは若者を象

徴するVY&アメリカントラディショナル志向のVAN。JUNとは好対照であった。

③ 音楽はポプティラン、ビートルズ、ローリングストーンズなどなど。文化祭で校内にこだましていた「サティスファクション」を聞きながら、イナゴの揚げ物にチャレンジしたのが懐かしい。

④ 雑誌はというとメンクラ、平パ。雑誌はというとメンクラ、平パ。

⑤ 車は免許もないのに憧れはハコスカ、S8、そして2000GT。

⑥ テレビは11PM「シャバラバシャラバシャラバ」ああ懐かしい藤本義一さん「次、まいるましよう。」

二、かくしてこの道に飛び込んだ。デザインという仕事はまわりから思うほど華やかではなくむしろ精神力と体力勝負。

体力づくりとしてウィンドウサーフィンを長く続けている。今でも、阿漕や町屋海岸まで足を伸ばすことがある。

これも、今思うと当時所属していた、水泳部での影響が大きい。水との親しみ及び一種の浮遊感覚が共通項として今に通じる。

岩田橋から岩田川を見るたびに思ひ出す。一月の寒空の下、当時の観海流師範の模範演技の前座として、仲間たちと寒中水泳に参加したこと、

そして、その後の風俗の気持ち良かったこと、一杯のラーメンの有難さが走馬灯のごとく蘇る。

三、そして、大変因果な仕事である。環境、安全など、自動車業界は良くも悪くも何かとマスコミの話題になる。

カーデザインは、法規、性能、構造、コスト等種々条件を乗り越え出衆上がる。時代背景や地域ごとの風俗習慣に左右されることもある。

I 入社して数年の頃は、まだメジャーでなかった四輪駆動車の開発を担当した。

ベースとなる標準ボデー(二輪駆動)に仕様上必要なタイヤサイズとの関係から、大きめのフェンダーをつける企画となっていた。

当然法規もクリアした状態で、あとは国から認証を受け、デビューを待つばかりという段階で、「この構造は暴走族をおおるかもしれないから構造、形状の見直しを行う」と当時の社会現象に配慮した判断であった。パニックになったのは言うまでもない。

II また、ある乗用車の開発の参考に北京に行って、話がポデーカラーにおよんだ時のことである。

いわゆる官公庁や役員車で使われるような「紺色」を提示したら、微妙な色合いのニユアンスにより「この色は、この地域の喪服の色と似ているので却下」であった。

同窓会資料からみる弘田龍太郎

服部 久 士 (昭和49年卒)

その他、それぞれ開発にドラマがあり、枚挙にいとまがない。まだコンピュータも発達していない時代では、残業が一〇〇時間を越えたり、徹夜も珍しくはなかった。四、ところが、今までこの仕事をやめ

たいと思った事がないし、続けられたのは何故だろう。色々要因はあるが、やはり、高校での人間形成や基礎的な学力に負うところが大きいのではと感じている。前述の森谷先生、踊子の姿勢を教

えていただいた城先生、海外赴任で役立った英語の基礎など様々な教えをいただいた先生方へ感謝の念を抱きつつ、同時に、この想いが次の世代に伝わるよう祈りつつログオフ。(自動車会社デザイン部)

では日本音楽史の面白い小話を紹介している。「書物について」と題した演説の寄稿もある。

弘田龍太郎にとって、十才〜十七才の感受性豊かな青年時代を三重県で過ごしたことは、彼の音楽生活に多大な影響を及ぼしているのではないだろうか。

さて、創立百年記念誌「あゝ、母校」が刊行されて、二十五年以上が経過している。幸いにも、その時の資料の一部が、クラブハウス二階に保管されている。今回の資料調査では、校友会雑

誌をはじめ、昭和初期〜大戦期にかけての三重県立津高女学校の舎監日誌や献立表など当時の学校生活を知る上で重要な資料や昭和二十四年の第一回音楽会のプログラム、二十六年の第一回東海近畿高等学校優勝弁論大会のプログラムなどが収集できた。弁論大会は、県内七校をはじめ愛知・岐阜・滋賀・大阪・兵庫・和歌山の各府県の高

校から四十五名の参加があり、新町小学校の講堂で開催されている。審査委員長に岩田直衛先生の名が見える。第二回以降のプログラムがあると演題の変化を追えるのだが、残念ながら今回の資料の中には含まれていない。創立以来二五年余の伝統があるが、昭和二十年七月の空襲で陳川校舎が全焼し、さらに昭和三十七年末の校舎火災で多くの学校関係資料が焼失している。学校自体に資料は少なく、『校友会雑誌』も抜けている号が多い。学校の歴史を後世に伝えるためにも、資料が喪失する前に同窓会へ資料を寄贈されることを願っている。(三重県生活部文化振興室)

ご冥福をいのる

—故千草嘉夫先生のこと—

鈴木 茂 (昭和20年卒)

千草嘉夫先生は、私より三級下でして、旧津中学を昭和二十三年の卒業です。

母校で長年、こいっしょに勤務させていただきました。私も下手のよこ好きにて、「書」のことには関心が無いわけでもなく、いろいろ教えてもらったものです。「人と書と眞に老ゆ」「人、墨を磨らざれば、墨、人を磨る」など、教えていただいた名句をいまも大切にしています。

千草先生が大書された「津高校歌」が、体育館に今もかかっていると思いますがそれは、私の目の前でお書きになられたものです。

同窓会報冒頭のことばや百年誌表紙の「あゝ、母校」。また、ポर्ट部百年記念の手拭いにも筆をふるっていただきました。みな先生にお願いしたのでした。そして先生は、各クラスの掃除用具にまで、至極お気軽に筆を執ってくださいました。頭がさがります。深く学ばせていただきました。公民館などでふと先生のご揮毫と出合っ、はっとさせられます。眞に母校津高校を愛しておられました千草先生のご冥福を心よりお祈り致します。



昨年四月から教壇を離れ、三重県生活部で『三重県史』の編さんの仕事に従事し、通史編近現代を担当している。津高へは、この三月末から同窓会所蔵資料の調査で数回訪れている。その際に、中庭の一角に「弘田龍太郎の碑」が建てられているのに気づいた。弘田龍太郎は、「靴が鳴る」「春よ来い」「雀の学校」などの童謡の作曲家として有名である。明治三十五年、父正郎の第一中学校校長就任に伴い千葉から津市へ転居し、養正小学校に通った後、三十八年に第一中学校へ入学した。津高の大先輩の一人である。在校中の様子などを「校友会雑誌」四十二年第三十四号〜四十二年第四十一号の記事から見てみたい。

彼は、「三中武術大会出演記事」で撃剣部(剣道部)の初陣の一員に名を連ねたり、神奈川師範生と対戦している。さらに、五年生の時は、第十一回端艇競争会を学年チームの漕ぎ手となっており、スポーツマンとしての一面を

世界パズル選手権に出場して

3年6組 横田 真 秀



僕は夏に東京で開催された全日本パズル選手権を経て、十月九日から十一日にかけてアルカリアで行われた「第十五回世界パズル選手権」に出場し、個人・団体戦とも世界第三位の成績を収めることができました。

パズルと聞くと、ジグソーパズルやルービック・キューブの類を思い浮かべる方も多いと思いますが、この選手権で出題されるものは、紙の上で論理的に解くものです。例えば「数独(ナンバークロス)」などは、雑誌や新聞にたまに載っているもので、そのようなものを思い浮かべてもらえばよいと思います。さて、そのような問題を解く速さを競う大会に出場したのですが、まず真つ

ラグビー同好会 再出発!

ラグビー同好会顧問



今年度四月に同好会発足という形で、一九三六年創部という伝統ある津高ラグビー部の復活への第一歩を踏み出すことができました。これもひとえに日頃から公私にわたりご支援くださった保

上村 和弘(昭和59年卒)
藤田 隆司(昭和63年卒)

護者会やOB会の皆様のおかげであると厚く感謝いたしております。これまでの二年生六人に加えて、一年生十一人と留学生のルーカス君が入部し、現在十八人となりました。八月には長野・菅平高原にて夏合宿もこなし、九月に行われた十人制の一年生大会では三位入賞も果たしました。残念ながら花園予選は初戦で敗れましたが、十二月より始まる新人戦ではベストエイトが戦う決勝トーナメントへの進出を目指し日々練習に励んでおります。今後ともグラウンドに足を運んでいただき部員たちの勇姿をご覧いただきたくお願いいたします。

津高校進路事情

進路指導部 鈴木 達哉(昭和53年卒)

進路指導部では県下のトップ校として、生徒を社会に有為な人材として送り出すべく、年間目標として①高い志と知的好奇心を育てる。②データを活用しつつ、データを越えた生徒の能力を引き出す。③将来を見据えて行動できる自立した生徒を育てる、の三点を掲げて指導に当たっています。そのため、授業や課外、ガイダンスの充実はもとより、「自分探し」という生徒が自ら進路選択できる力をつける企画を多く取り入れています。今年には従来の大学模擬授業や研究所訪問、医学部体験などに加えて、新たに、東大・京大をはじめとするキャンパスツアーや卒業生の座談会なども企画し、好評を博しました。これらをおこなうに当たっては同窓生の皆様にご協力いただきたくお願いいたします。あらためて、

先に感じたのは強い緊張感でした。自分の獲得した得点が、そのまま自分の順位に反映されるといふ緊張感です。自分の成績を自分で背負うということ、は、当然といえば至極当然のことなのですが、世界の舞台に立って、改めてその重みを感じました。

また、他にも今回の選手権の経験から得たものは多く、それらは何らかの形で今後生きてくると思います。例えば、二年前にクロアチア大会に出場した時には強い緊張感であった表彰台に立つことが出来た、ということ自体が今後の自信となりますし、滑り出して失敗しながらも粘り強く得点を重ねた経験は、初めに失敗した時でも常に逆転を狙いつつ最後まで物事をやり切る力になると思います。

(大学合格者数)

	国立	公立	私立	短大
(2006) H18年	242	48	787	8
(2005) H17年	211	48	687	7
(2004) H16年	246	41	811	11
(2003) H15年	214	54	681	11

お礼申し上げます。また、今春の進路状況においては国公立大学合格者290名は県下のトップ、また、旧帝大をはじめとする難関大合格者は79名で10クラス規模の学校になってからは過去最高の数字を記録しました。この結果を踏まえながら、現状に甘んずることなく一人一人の生徒が「津高で学べてよかった」と思えるよう努力をしてまいります。今後ともご指導よろしくお願いたします。

(主要大学合格者数)

	北海道	東北	筑波	お茶の水	東大	一橋	東京工	東京外大	京大	横国	静岡	金沢	信州	名古屋	名大	三立	京大	京大	大阪府立	大阪府立	大阪府立	神大	奈良	奈良	奈良	慶応	慶応	早稲	上智	青山	中央	東京理	日大	明治	法政	立教	南山	名大	皇学	龍谷	京大	同志	近大	立命	関西	関西
(2006) H18年	7	2	4	1	4	3	3	2	3	6	7	3	20	11	11	7	9	0	9	20	3	12	2	11	4	3	19	28	3	8	15	33	11	12	9	8	36	39	35	19	9	56	34	112	48	39
(2005) H17年	7	3	8	1	3	2	1	4	2	10	8	1	14	12	7	6	2	11	8	2	7	5	6	4	4	14	30	1	2	5	13	9	15	3	5	32	33	20	10	13	33	38	108	34	16	
(2004) H16年	8	2	3	2	6	2	1	0	7	13	12	8	25	10	10	65	0	6	12	6	6	5	4	2	1	23	24	4	10	12	23	6	11	9	4	57	39	16	18	12	50	31	132	57	19	
(2003) H15年	3	0	3	1	4	1	2	0	9	11	5	7	23	9	8	63	1	10	9	0	7	2	6	2	0	11	20	10	2	9	19	15	7	7	1	49	35	19	18	13	42	36	101	37	30	

各地で同窓会開催

東京同窓会



東京同窓会は、五月二十七日(土)虎ノ門の霞ヶ関ビルで開催、朝からの雨でしたが、出席者は一三〇人、十二時丁度に開会となりました。先ず、谷口武会長が歓迎の辞を、続いて本部の川喜田貞久会長の挨拶の後、今春赴任された渡辺久孝校長先生からは、津高の現況報告がありました。今年の恩師招待は、保健体育の林茂典、佐野由子の岡先生。ご来賓の紹介の後乾杯に移り、林先生が首頭を取られ懇親会となりました。

会はこのテーマ、「母校も心もとも温かい」に沿って進められ、年次を超えた交流で盛り上がりました。新入会員を代表して、紀平将史君と真田佳織さんが若々しく決意表明、竹林武一副会長の話の後、校歌を斉唱し、佐野由子先生が挨拶されお聞き取りました。今

年の年次幹事は昭和三十四年卒が担当、終了は十四時三十分、予定通りでした。会の運営にご協力頂いた方、当日ご出席の皆さん方どうも有難うございました。(幹事一同)

九州同窓会

第十七回津高九州同窓会が六月十日(日)福岡国際ホテルで開催されました。ご来賓の藤岡美也子副会長(昭和31年卒)より母校の充実した進路指導と体験学習としての第五回目のマレーシア研修についてお話いただきました。

会員談話は「津高の思い出」と題して陣野昇治会長(昭和22年卒)と池村昭司氏(昭和22年卒)より、軍事訓練と学徒動員の日々の生活の中で聞いた玉音放送、戦後は校舎も消失して久居の練兵場跡に自分達で机や腰掛を寄せ集めての授業再開等、津中時代の苦勞話を



されました。お一人は同期生で「おお、そつたんなア」と思い出したから話される具体的な内容に全員が感動を覚えませんでした。戦後六〇年の今日が如何に恵まれているかを重認識させられました。

その後、楽しい宴会半ばに昨年の団体と今年の全国高校選抜ボート競技男子シングルスカルで見事に優勝を成し遂げた清水大輔君の紹介がありました。実に当初は部員一人で頑張った末のエピソードに拍手が沸き起りました。校歌斉唱の後に来年度の再会を約して閉会しました。(昭和28年卒 井田 佑)

名古屋同窓会

九月十六日(土)午後五時、「9回の表、阪神の攻撃、中日山本ノーヒットノーラン達成まで後三人」手に汗を握り、テレビ中継を見る。「さて後一人、赤星打った、サイドゴロ森野さばいて一塁へ、アウト」やりました、山本ノーヒットノーラン達成です。」

五時十五分、あわててタクシーに乗り込む。五時三十分、東急ホテル着。平成十八年度津高同窓会会場では、水野周子さんが流暢な司会で会を盛り上げています。「本日のミニ講演会は、中日ドラゴンズ社長の西川順之助さんです。」「西川です。たった今、山本がノーヒットノーランを達成、この講演会が終わりましたら、山本にお祝いを持ってナゴヤドームに駆け付けねばなりません。山本は、私より高収入ですが。」会場

からノーヒットノーランへの拍手と、西川氏への楽しい講演に笑いの渦。その後の懇親会もなごやかに進み、恒例の津高クイズ、校歌の合唱で頂点へ、閉会後はそれぞれなつかしい顔と名古屋の街へ消えて行った。

(昭和44年卒 高北幸夫)



京都同窓会

第四十回津高京都同窓会は、昼は時代祭、夜は鞍馬の火祭と洛中・洛外が祭りの興奮に酔いしれている十月二十二日、同窓会本部より川喜田会長、田川副会長、佐々木様、津高より渡辺校長先生をお迎えしホテル平安の森京都で開催されました。

中西会長からは、「京都同窓会設立四十回を迎えたが、毎年出席者が減少しつつある。新しい力を借り、意義のある同窓会になるよう工夫を凝らし過去の盛会を取り戻したい。」との決意が述べられました。川喜田会長からは、「出席者が毎年減少する中で、津高京都同窓会が設立



四十回を迎えたことは賞賛に値する。今後とも創意工夫を生かし組織の発展に努めて欲しい。」との励ましの言葉を頂きました。渡辺校長先生からは、現在の進学状況に加えて、日本は元より世界を股にかけ芸術や学業部門で活躍している在校生や卒業生の活動状況を生き生きとお話頂きました。

懇親会の席では、昭和七年に津中を卒業、九十三歳を迎えられ現在も矍鑠として活動されている鈴木靖隆さんに健康の秘訣を披露頂くとともに、命の続く限り京都同窓会へ出席したいとの思いを聞かせて頂いた後、時代祭の行列が平安神宮に着く二時前に来年の再会を約して散会しました。

大阪同窓会

第四十回津高大阪同窓会は、十月二十九日(日)大阪・天王寺都ホテルにて本部より長谷川、山田副会長、津高より渡辺校長先生、事務局担当の菱井先生、恩師の中谷、澤口先生をお迎

お知らせ

平成十九年度 同窓パーティー

日時 平成十九年八月四日(土)
午後三時より

場所 津センターパレスホール
津都ホテル

担当学年幹事 昭和49年卒(代表 西村 修一)
昭和61年卒(代表 落合 賢治)

平成十八年度の総会・ パーティーを終えて

実行副委員長 奥山 真司(昭和60年卒)

八月五日土、「再会 新しい津へ」というテーマのもと、津センターパレスホール・津都ホテルを会場に、平成十八年度陳川・三重桜・津高同

窓会総会・パーティーが盛大に開かれました。当日の参加者は七三七名でした。総会は、川喜田同窓会長のご挨拶



平成十九年度

同窓パーティーのご案内

運営委員長 西村 修一(昭和49年卒)

平成十九年度の陳川・三重桜・津高同窓パーティーは、新しい出会い、新しい仲間、新しい思い出作りの場となるよう計画を進めております。

久しぶりの出会い、年次を越えた仲間との語り、それを通じた思い出をページに加えて頂けるよう、ゆとりをメインにして運営していきたいと思っております。

また、恩師の方々とのフランクな交流の中で、「あの時」の思い出を鮮やかに蘇らせて頂ける趣向も考えてまい

ります。

ご参加の皆様全員にご満足頂ける企画は難しいことですが、元氣な懐かしい顔を見て、時を忘れて楽しく会話が弾む、そんな同窓パーティーにしたいと、着々と準備に当たっています。

今回幹事を担当させていただきますのは、昭和49年卒と昭和61年卒です。是非、皆様と同じ時を過ごしたいと思っておりますので、多数のご参加を心よりお待ち申し上げます。

に続き、今年度より着任された渡辺学校長よりご挨拶をいただきました。二十一名の来賓紹介後、代議員会報告と続き、スムーズに終了しました。パーティーへの準備までに女性コーラス隊「小さな四季」による童謡メドレーを披露しました。

その後、竹林副会長の元気でかつユニークなご発声により、明るい雰囲気ですべての参加者が始まりました。今回は内卓にすべて料理を配膳し、ゆったりと食事をとっていたただけるよう配慮しました。

また、イベントは音楽をメインとし、センターパレス会場では、先輩方のギター&バイオリン演奏、大正

琴&ピアノアンサンブル「メイプルリーフ」の演奏で優雅に奏でていただきました。一方、都ホテル会場では懐かしのエレキサウンド「ブルーウイスクアーズ」のロック演奏で盛り上がりました。

次年度幹事学年の挨拶に続いて恒例の校歌斉唱、同を組んで歌うグループもあり長年にわたり続いてきた同窓会の伝統を感じさせるフィナーレでした。

いろいろと至らない点もあったかと思えます。参加していただいた同窓生の皆様、本当にありがとうございました。

津高同窓会の 新ドメインがスタート

<http://tsuko.jp/>

メールアドレス
office@tsuko.jp

TEL・FAX 059-229-7331

主な掲載内容

*各学年のサイトや掲示板

*津高同窓会の全体掲載板

*投稿記事

(連載、コラム、エッセイ、フォト)

*支部同窓会や各学年の同窓会開催などの情報

*がんばっているか青年諸君!

*ほぼ毎日更新の

「同窓会事務局ブログ」

*ホームページへの投稿もお待ちしております。

お寄せ下さい。

事務局 だより

▼十二月の雨と共に、年一回発行の同窓会報四四号をお届けします。二万二二七〇部の発送です。

本年より、題字・タイトルを工藤雅俊氏(昭和45年卒)にお願いしました。▼ペーパーレス化にご協力いただける(今後、会報はホームページから見るので会報の送付は不要)方は、事務局までメールにてお申込み下さい。

▼事務局開局日 月・火・水・金曜日
午前九時十五分〜午後四時十五分